

「学生×地域」によって紡ぐ過疎地域の未来 報告書

プロジェクト担当：地域資源マネジメント学科 笠松 浩樹

■実施内容

A地区：小規模多機能自治との連携（住民の暮らし、生業、思いを聞き取り、農家カードを作成）

B地区：古道活用グループとの連携（雨乞いの古道の整備と登山、その周辺森林の手入れと活用）

C地区：頑張っている個人との連携（市街地の子どもを呼び込む森林活用イベントの企画・実施）

■連携相手の性質ごとにみたプロジェクト活動の評価

評価項目	小規模多機能自治	住民グループ	個人
活動で住民の連携	50人以上	6人	2人
学生の自発性	積極的に関わった	興味のあることには自発的	興味のあることには自発的
地区独自予算	あり	なし	なし
継続性・発展性	学生×地域が成立し次展開の可能性あり	教員主導で継続・発展することは可能	教員主導で可能だが住民の体力が課題
移住や帰郷の呼込	なし	なし	なし
関係人口の呼込	なし（関係者以外）	4人（関係者以外）	17人（関係者以外）
農林漁業資源活用	十分にある	十分にある	十分にある
教育としての関与	年16日	年4日	年5日
「むらおさめ」	必要なし	必要なし	必要だが話できない



農家カード



森林の手入れ



子ども向け企画

■まとめ

組織・グループが複層化するほど学生の関わり方、自発性、継続性・発展性はある。

地域資源の活用は、連携相手の性質に関係なく展開可能。また、教育の場としても活用可能。

「むらさめ」は小規模高齢化が極限的な集落であっても話題には出しにくく、より深い関係性が必要。